

## 中国人と日本人

高橋 覚

尖閣諸島の問題で日中間が大荒れ模様になった二〇一〇年の秋だった。その時の中国人の行動ぶりをテレビで見ていると、上海の大学に在籍している息子のことが心配になり、毎日電話で様子を聞いた。

大学の授業中に教授が、学生の中で唯一日本人である息子に向かって「尖閣は中国のものだ」、といきなりまくしたてたという。息子も負けずに言い返した。授業中の大教室は、二人の会話以外はシーンとしていたという。

また、息子が趣味で行っていたホテルのジムのフロアで、いきなり複数の中国人の若者に取り囲まれ、「尖閣は中国のものだ」とわめかれたという。息子が中国語でさんざんまくし立てたら、あとでゆっくりと言って引き下がって行ったということだった。

そんなことがあり、また次の年には震災があつた翌年、私たち夫婦は、5月の連休を利用して、仙台からはじめて上海へ行った。そして、息子の案内で大抵のところをまわった。

私たちは行く前から中国人にあまり好感を持っておらず、むしろ警戒もしていた。

予約したホテルに着いた途端から、ロビーの大騒ぎに悩まされた。

「ここはちょっとハズレたね」

息子がニヤニヤしながら言った。ロビーの中はいつも人の山。支配人だかボーイだかは最初に一度まじまじとこちらを睨んだだけで、それっきり4泊の間、挨拶も顔もしめない。出入り口に朝から晩まで立って、声を発するのがもったいないかのように、出入りする客をただ睨んでいるだけだった。客の方もそんなこと構いなしで、とにかくやかましいこと甚だしい。喧嘩してるのかと思うような高い声に慣れるまでは時々ハラハラした。

喧騒の大都市上海。まずムツとする空気の臭いにまいった。また、地下鉄の中でも人々は顔を突き合わせて大声で話していた。そのうるささに圧倒された。どうしてそこまでする必要があるのでろう。食堂なども同様だった。

買い物の中には、店の番人やお愛想を一切しない。買ってくれる人にしか興味がないようだった。客がそばにいても、いらっしやいませ一つ言わない。とてもはつきりしていた。

バスは、バンバン走った。息子の話によると、中にいる車掌のおばさんは、客を見て運賃を決めるといふ。日本人と見ると高くとられた。

機嫌の悪い運転手のバスに乗ったときには、乗るとき

「早く乗れ」

と叱られ、バスはクラクションを鳴らしっぱなしで乗用車を蹴散らして走った。私たち乗客は手すりにつかまっておとなしくじっとしていた。今の時代に、こんなバスもあるのだ。日本のバスが、上海のようなことをしたら大変な苦情が出るにちがいない。不思議だったのは、口うるさいはずの中国人が運転手に文句一つ言わないことだった。

文化の違いということか、それぞれの領域の「自分の仕事」を暗黙の内にたがいに了解している国民性を感じた。

一方、私たちの日本では、電車に乗るとあちこちでケータイをじっと見つめる姿が日常の光景である。皆静かにケータイと話して自分の世界の中にいる。気配り、口配り、声配りが大切な作法のように。しかし、ファミレスの光景には、その理由はきかない。家族連れの楽しいはずの外食時間。子どもの一人はマンガに顔を埋め、一人はケータイの画面と無言の会話をしている。寂しい顔の両親。そのうち親もそれぞれのケータイを取りだす…。

息子は入っていた寮の修繕のために、一時アパート暮らしをしていたが、今回そこへも連れて行ってもらった。その当時お世話になったという隣の老夫婦に運よく出会えた。息子が持ち合わせがなくて電気を払えないでいたときに、立て替えてくれたという。老婦人は、にこにこ顔が人柄を示していて、とてもあたたかい人だった。皆で写真を撮った。

3泊もしてホテルの喧騒にもだいぶ慣れてきた日の朝食後に、ホテルの周辺を夫婦で少しゆっくりと散歩をした。

街路の両側は、早朝から小さな出店がいくつも並ぶ。道路のゴミを掃く仕事の人があちこちにいる。その傍らを、リヤカーを付けた自転車が通ってゆく。ダンボールを集めて行くのだ。

自転車やミニバイクの二人乗りが多い。見ると、リヤカーの自転車もミニバイクも、中年以上の夫婦がやたらと多い。夫婦のゴミ屋さんも多かった。そして、後ろに乗っている夫か妻は決まって終始満面笑みだった。目の前を、タイツにミニスカで太った奥さんがさっそうとバイクを飛ばし、後には夫が必死にしがみついているのにも出会った。

「みんな、しあわせそうね。」

家内がそれらを見ながら笑って言った。むろん嫌みではない。

自分の幸福に一番興味があり、そのために懸命に働く。他人の仕事や贅沢に関心はない。

幸福といえば、私たち日本人は今ブータンの「幸福度」に大変興味があるようだ。頼まれもしないのに、ブータンの「しあわせ」が本物かどうかさかんに検証し、今後の見通しまで立てる。税金の使い方次第だという議論と一緒に。日本人と、ブータンの人々と、ときに中国人と比較しながら。

しあわせは、人の心の中にある。外の条件も周囲の環境も大きいことではない。日本人がブータンについて詮議するまでもない。ブータンの幸福はブータン人が考える。施策がたとえ失敗しても、ブータンの人々は失望せずに前進することだろう。

そしてまた、どここの場所でも、ふれあいの人を優しくする。それが人を育てる。忘れられない恩への感謝と優しさへの思いが、私たちを人に行っているのだと思う。そこには、人種も国も関係ない。

中国人と日本人。長い歴史の絆で結ばれた隣人を、島一つのことですうわけにはいかない。

上海からの帰りの飛行機の中で、家内が言った。

「中国人を以前より好きになったわね。」

私も同感だった。仙台空港に近づいてきたとき、人家の跡形がなくなった海岸線をことばなく眺めながら、中国をはじめたくさんの国からいただいた支援を思い出した。

また震災の後、息子は中国人のクラスメートたちから励ましの色紙をもらったと聞いた。

尖閣問題の時にも、息子の携帯に、中国人の友人たちから、何通ものメールが入ってきたという。どのメールも、「今は危ないから、外を出歩くな。」というものだった。

その話を聞いて、胸が温かくなるのを感じた。そして、上海に行ったとき、息子が世話になった老婦人のにこにことした顔を思い出した。